

Title	ワークショップ : "The mass-count distinction: philosophical, linguistic, and psychological perspectives" (6月8日 三田キャンパス東館6階 G-SECLab)
Sub Title	
Author	飯田, 隆(lida, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.9, (2009. 8) ,p.3- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000009-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ワークショップ

“The Mass-Count Distinction: Philosophical, Linguistic, and Psychological Perspectives”

(6月8日 三田キャンパス東館6階 G-SECLab)

2009年6月8日の午後いっぱい、慶應義塾大学グローバルCOEプログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」の主催で、「The Mass-Count Distinction: Philosophical, Linguistic, and Psychological Perspectives」という標題のワークショップが開催されました。

英語の名詞には「a student, students」のように、不定冠詞を取り、単数形とは区別される複数形をもつものと、「water」のように、通常は、不定冠詞を取らず、また、複数形ももたないものがあることは、よく知られています。前者を可算名詞(count noun)、後者を質量名詞(mass noun)と呼びます。可算名詞と質量名詞の違いはほかにもあります。たとえば、可算名詞については、「many students」とは言えても「much students」とは言えないのに対して、質量名詞については、その反対に「much water」とは言えても「many water」とは言えません。

ところで、日本語には、不定冠詞もなければ、文法的な単数複数の区別もありません。また、「many」と「much」はどちらも「たくさん」で表すことができます。したがって、「学生」と「水」の違いは、もしあるとしても、英語におけるような仕方では特徴づけることはできません。朝鮮語も、この点に関しては、日本語とよく似ています。

1968年に発表された「存在論的相対性」という論文の中で、アメリカの哲学者クワインは、「五頭の牛」のような日本語の名詞句を取り上げて、ここに現れる名詞「牛」は、可算名詞として解釈することもできれば、質量名詞として解釈することもできると論じました。また、言語学の中でも日本語や朝鮮語のような言語における名詞はすべて質量名詞として解釈されるという仮説（「質量名詞仮説 mass noun hypothesis」）が立てられています。

今回のワークショップは、哲学、言語心理学、自然言語処理といった異なる分野の研究者が集まり、クワインの説、あるいは、質量名

詞仮説にどれほどの妥当性があるのかを中心的な論点として議論する場所として企画されたものです。

このワークショップを企画した飯田隆氏（慶應義塾大学、本拠点哲学・文化人類学班所属）による簡単な概観のあと、四名の研究者による発表が行われました。最初に話されたのは、Byeong-Uk Yi氏（トロント大学）で、「可算名詞／質量名詞」という区別の歴史から始めて、この区別の正確な特徴づけのむずかしさを強く印象付けました。ただし、時間がなかったために、日本語と朝鮮語におけるこの区別について論じる部分が、ワークショップの際に省略されてしまったことは、残念でした。ついで、Francis Bond氏（独立行政法人情報通信研究機構）は、自然言語処理の観点から、日本語の助数詞あるいは分類辞(classifier)の具体相について話されました。

休憩の後、ワークショップの後半は、今井むつみ氏（慶應義塾大学、本拠点言語と認知班所属）による報告から始まりました。この興味深い報告の中で、今井氏は、脳波の測定を伴う実験の結果が、「可算／非可算」の区別が、文法的なものであるよりは、概念的なものであることを示唆すると論じられました。本ワークショップを締めくくったのは、Lajos Brons氏（慶應義塾大学）の「自己としての他者／自己でないものとしての他者」とでも訳することのできるタイトルをもつ報告でした。その中で Brons氏は、質量名詞仮説が、自分とは異なる文化に対するときに典型的に生じる概念的誤謬に基づくものであると論じました。「可算名詞／質量名詞」という区別、それを日本語や朝鮮語のような言語に対しても適用しようとするときに生じる問題、それは、言語学の問題にとどまらず、異文化を理解しようとするときに生じる、より大きな問題の一環であることを聴衆に印象付ける報告でした。

（飯田 隆）

For the whole afternoon of June 8, 2009, a workshop had been going on, which was organized by CARLS and had a title “The Mass-Count Distinction: Philosophical, Linguistic, and Psychological Perspectives.” As the title suggests, the speakers at the workshop came from various fields such as philosophy, psycholinguistics, natural language processing, and the audience also consisted of the people with different interests and backgrounds. The central themes of the workshop were the following: How should we characterize the mass-count distinction across the different languages? Is there any validity to the mass-noun hypothesis which claims that the so-called classifier languages like Japanese, Korean, and Chinese, have only mass nouns and not count nouns. There were

four talks besides an overview of the issues involved by Takashi Iida (Keio University) who was the organizer of the workshop. The first of these was given by Prof. Byeong-Uk Yi (University of Toronto) and was mainly concerned with the characterization of the count-mass distinction. The second speaker Dr. Francis Bond (NICT) talked about the various types of Japanese classifiers. After a short break, the workshop resumed with a talk by Prof. Mutsumi Imai (Keio University). She talked about the psychological experiments she had conducted in order to ascertain the nature of the mass-count distinction. The last speaker of the workshop was Dr. Lajos Brons (Keio University), and he talked about the fallacy that lies behind the mass-noun hypothesis.

